

分析

〔来場した大学生の特性を掘り下げる〕

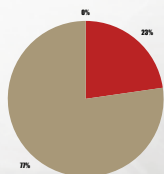
「また野球観戦をしたいと思うか」という質問の結果

一軍戦なら見に行く⇒**23%**

一軍・二軍に関わらず弘前で開催するなら見に行く⇒**77%**

〔N=88〕

また野球観戦をしたいと思うか



9

分析

①内野席に学生限定のシートを設ける

策定理由

友人ときたときに満足してもらうため

周りが大学生という安心感から、快適に野球観戦を楽しんでもらうため

考察

周りも気軽に観戦しに来た大学生で安心

リピーターの創造

長期的な顧客の創造に繋がっている

10

6.分析

②西弘前商店街との提携

策定理由

誘うという行動や団体での行動を誘発

飲み会が好き

西弘前商店街と密接な関係にある

考察

西弘での企画がチケットを購入する動機となっていない(アンケートより)

楽天野球団様の「地域密着」という経営方針に合致した

地域密着を実現できた点

今後も継続的に関係を築いていく土台となった点

11

企画改善案の提示

大学生をターゲットとした場合、誘われる側のニーズに注意して戦略を打つ必要がある

ニーズ

「野球に興味がない誘われてきた」顧客

1.豚肉企画、2.アツパルバ(イ・アンケートより)

野球観戦自体に興味がないため、「休日き友人と楽しむ手段の1つ」になっている

「休日を友人と楽しみたい」

企画改善案

・球場での対戦相手のご当地グルメを食べられる
→対戦相手に関連した食べ物など(例:BS=神戸牛)

・筋トレをしているところを選手に応援してもらう企画

12

4. じょっぱり起業家育成検討委員会議事録

4-1. 第1回 じょっぱり起業家育成検討委員会議事要旨

日 時：平成28年6月24日（金） 13：45～14：45

場 所：弘前大学総合教育棟 共用会議室

出席者：伊藤成治（弘前大学理事），倉田昌直（ブナコ株式会社），辻悦子（企業組合でる・そーれ），野呂英樹（株式会社あおもり海山），米田大吉（NPO法人プラットホームあおもり），坂本崇（弘前観光コンベンション協会），町田直子（NPO法人ACTY），柳生敏孝（楽天野球団），外崎達士（株式会社青森銀行 杉山委員代理），村上照彦（株式会社みちのく銀行 浅利委員代理），木村次郎（青森県地域活力振興課），福田実（弘前市産業育成課），横澤幸仁（青森県産業技術センター 弘前地域研究所），大浦雅勝（株式会社コンシス 特任教授），西谷雷佐（合同会社西谷 特任准教授）の各委員

陪席者：遠藤このみ（経済産業省），齊藤瑞希（経済産業省），六沢翼（東北経済産業局），古川康平（東北経済産業局），竹内恭介（青森県庁），猪股豪（弘前市役所），小山宏（弘前大学副理事）

事務局：森樹男，熊田憲，高島克史，大倉邦夫，福眞吉教，葛西裕美，中屋敷雅江

議事に先立ち，伊藤理事（教育担当）から挨拶があった後，各委員の紹介があった。

引き続き，委員会設置要項第6条の規定に基づき，本委員会の委員長に伊藤理事（教育担当）が就任することが提案され，異議なく了承された。

議事1 じょっぱり起業家育成検討委員会設置要項（案）について

事務局（弘前大学 森）から，配布資料に基づき，「じょっぱり起業家育成検討委員会設置要綱（案）」について説明があり，異議なく了承された。

議事2 今年度の取組について

事務局（弘前大学 森）から，配布資料に基づき，産学連携サービス経営人材育成事業及び本学の取組について説明があり，概略次のとおり質疑応答があった。

- （1）本事業は経済産業省の補助金で取組を行っていると思うが，補助金なくなる4年目以降については，どのように考えているのか。産学官連携で教育プログラムを開発しても，補助金なくなればやめる方向性なのか。

上記の質疑に対し、伊藤理事（教育担当）から、（１）について、本事業で開発した内容を既存のカリキュラムに落とし込み、一過性のものではなく、産学官連携で開発した教育プログラムがサービス経営人材育成として稼動していくよう、大学の授業として存続させる覚悟で実施していく。また、今日説明したすべての内容が補助金を使用して行うものではなく、部分的には違う財源も使用して行う予定で、今後いろんな自治体や企業と連携し、この事業をどう創造させていくのかという部分も含めて議論していく予定である旨説明があった。

議事３　じょっぱり起業家育成プログラム検討部会について

事務局（弘前大学　森）から、配布資料に基づき、「じょっぱり起業家育成プログラム検討部会」に係る目的、検討事項、部会所属（案）について説明があり、異議なく了承された。

引き続き、委員会設置要項第９条の規定に基づき、食産業プログラム部会の部会長に大浦委員、観光産業プログラム部会の部会長に西谷委員が就任することが提案され、異議なく了承された。

最後に委員長から、次回以降の委員会においても種々の意見交換を行いたい旨の発言及び本事業への協力依頼があった。

以　上

4-2. 第2回 じょっぱり起業家育成検討委員会

日 時：平成29年2月23日（木）13：30～15：00

場 所：弘前大学総合教育棟 2階 大会議室

1. 開 会

2. 議 事

- (1) 今年度の取組について
- (2) 食産業プログラム部会報告
- (3) 観光産業プログラム部会報告
- (4) じょっぱり起業家育成に関わるカリキュラムについて
- (5) 次年度事業計画について
- (6) その他

※議事録の詳細については、次年度の報告書に掲載予定である。

5. じょっぱり起業家育成食産業プログラム部会議事録

5-1. 第1回 じょっぱり起業家育成食産業プログラム部会議事要旨

日 時：平成28年7月19日（火） 14：30～15：45

場 所：弘前大学総合教育棟 1階 共用会議室

出席者：大浦雅勝（株式会社コンシス 特任教授），辻悦子（企業組合でる・そーれ），米田大吉（NPO法人プラットホームあおもり），村上照彦（株式会社みちのく銀行 浅利委員代理），福田実（弘前市産業育成課），横澤幸仁（青森県産業技術センター 弘前地域研究所）の各委員

事務局：森樹男，熊田憲，高島克史，大倉邦夫，恩田睦，福眞吉教，葛西裕美，中屋敷雅江

議事1 食産業プログラム部会の目的について

大浦部会長から，食産業プログラム部会の目的について説明の後，意見や質問を発言願いたい旨説明があり，概略次のとおり質疑応答があった。

・食産業プログラム部会の目的・定義について

- (1) 「じょっぱり起業家」とは，起業ということにどこまでこだわることなのか。狭い意味でターゲットを絞るのか，それとも業を起こすところにこだわらず，働く働き方の一つであるという観点なのか。
- (2) 「サービス産業」とは，2次産業・3次産業のところでどこまでをターゲットにして考えればいいのか。

これに対し，大浦部会長から，(1) について，業を起こす人間だけではなく，青森県が好きで，青森県のものにこだわって活動する人材，起業家マインドを持った人材育成を目指す旨の回答があった。また，(2) について，観光と食という部分で絞り，2次産業，3次産業に付加価値をつける（6次産業）部分を「サービス産業人材」の定義として進めたい旨の回答があった。

議事2 食産業人材の目指すものについて（必要な能力）

大浦部会長から，食産業人材の目指すもの，必要な能力について，意見を発言願いたい旨説明があり，概略次のとおり委員から意見等があった。

- (1) ないものを上手に作り出す発想力や付加価値をつける力，起業家マインドを持った人材を育てることが必要だと思う。食べたことがない人に食べたことがあるかのように説明する力が非常に大切だと思うので，その説明力みたいなものは重要だと感じる。

- (2) 青森県の特有な食材について、その特徴をどのように捉えることができ、かつ解析、発想することができるかということがまずは必要だと思う。そこから、事業プランや食品開発に落とし込むとき、一連の流れを分かったうえでのプラン作成、全体を見渡すことができる人材が起業できる人だと思うので、そのプログラムになってくれば理想的だと思う。
- (3) 食産業に限らず、想像力を持つ、あるいは妄想するというクリエイティブではなくイメージーションが必要だと思う。またビジネスの世界では一人でゼロから 100 まで全てやるということはある得ないので、周囲の人を巻き込む力、共感していただく力が必要だと思う。
- (4) 食材をどのように加工し、どういうところで提供するかまで、一連の流れを理解することが必要だと思う。また、青森県が好きだというマインドを育てることが重要で、失敗しても挑戦できるような環境づくり、風土が必要だと思う。
- (5) 消費教育というのが大事になってくると思う。お金の感覚を身につけ、大事なものと不要なものの違いを身につけていくことが食産業にもつながると思う。また、青森県の食材の魅力が分からない若い人たちが多いので、日常生活している中で、ちょっとした差異に気づくことができる人材が増えれば、青森の魅力をちゃんと知る人ができると思う。

引き続き、大浦部会長から、流通、販売について、若い人たちに身につけて欲しい能力、必要な人材について発言願いたい旨説明があり、概略次のとおり委員から意見等があった。

- (1) 今の大学生は、いいアイデアを形にすれば商品になると甘く見ている。商品になるまでの過程を簡単に考えているし、値入について無視しているように感じる。出口をしっかりとつくり物事を考えていかなければならないことを分かっていないように感じる。
- (2) 色々な企業の事例を見ると、商品の魅力を作り手側がわかっていないため、流通・営業に対して、的確にポイントを伝えられていない。コストについても、利益を上げる解決策として、買う人に高く売り、高い価値をつける、やはりそこに戻るので、最後の出口のところでどういう価値を消費者に訴えるかということを伝える必要があると思う。
- (3) 長年業務に携わってきて、全般的に出口から逆算して取り組む思考プロセスが不足していると感じる。ビジネスにおいて、学問で学んだことを活かせていない。日々の生活で想像力を落とし込めるような、ビジネスシーンをよりリアルなものにつなげられる日々の授業、カリキュラムであれば違ってくると思う。

- (4) マーケティングが必要だと思う。最初にどのようなところに商品を持ちたいか、そこを考えてからつくり込む、考える力が重要だと感じる。
- (5) 仕掛け人になれるような人材になってほしいと思う。失敗、成功体験などを通して、現場やその先を考える創造力など、それらを同時にできる力が必要だと思う。

引き続き、大浦部会長から、商品開発、サービスについて、食産業人材に必要なノウハウなど発言願いたい旨説明があり、概略次のとおり委員から意見等があった。

- (1) 加工についていうと、素材をまずよく知るところが必要になってくると思う。そこを理解したうえで、自社の技術で何かを考えたときに、本質として何であるが売れているのかという分析力、課題解決力が重要になってくると思う。
- (2) 製品開発については、最終的に出口をどれだけ見据えることができるかということに尽きると思う。自分たちの技術レベルをどこまで自己評価できるか、冷徹な自己分析力が必要だと感じる。
- (3) 商品開発というのは、アイデアが重要だと思う。イマジネーションをどううまく引っ張り出せるかというところが必要だと思う。
- (4) 地域の素材を知ること、地域の食文化やルーツを掘り起していく作業が新しい加工品を生み出すきっかけになるのではないかと。それによって、当たり前になってきたことを、若者の目線で新たによみがえらせるというようなストーリーができればと思う。

最後に委員から、食については、食感、テクスチャーなど、食べたイメージと味を連動させるというところを評価できる知識、概論が必要なのではないかと、との意見があった。

これに対し、大浦部会長から、農学生命科学部でそのような取組があるのかどうか確認したい旨の回答があった。また、本部会での意見を踏まえ、食産業人材プログラムの検討構築を進めたい旨説明があった。

以 上

5-2. 第2回 じょっぱり起業家育成食産業プログラム部会議事要旨

日 時：平成28年10月24日（月） 10：00～11：15

場 所：弘前大学人文社会科学部棟 4階 多目的ホール

出席者：大浦雅勝（株式会社コンシス 特任教授），倉田昌直（ブナコ株式会社），村上照彦（株式会社みちのく銀行 浅利委員代理），福田実（弘前市産業育成課），横澤幸仁（青森県産業技術センター 弘前地域研究所）の各委員

陪席者：猪股豪（弘前市役所）

事務局：森樹男，熊田憲，大倉邦夫，福眞吉教，葛西裕美，中屋敷雅江

議事に先立ち，事務局（弘前大学 森）より本事業の進捗状況や今後の状況について説明があり，その後大浦部会長から開会にあたっての挨拶が行われた。

議事1 第1回食産業プログラム部会検討事項の整理，確認について

大浦部会長から，第1回食産業プログラム部会検討事項の整理，確認について，配布資料に基づき説明の後，前回の取りまとめた結果に対する意見や提案について，発言願いたい旨説明があり，概略次のとおり質疑応答等があった。

- (1) 現在，自分が青森県の食材を使用した菓子店を開店し，弘前大学卒業生を雇用している状況なので，リアリティーがあり過ぎて思うところが沢山あった。基本的に，青森県が好きじゃないとスタートしない話なので，前回出た意見で良いと思う。
- (2) 配布資料をパッと見た印象だが，箇条書きにすると単語と単語が連携していない印象を受けるので，分析した後に発想しなければいけない・・・など，前回出た意見の関係性を少し整理し，少し長い文章や簡単な絵図があればいいのではないかな。
- (3) 経営学を学んだ上でということなので必要ないかもしれないが，財務分析力は当然必要になってくると思う。

これに対し，大浦部会長から，(2)について，後半のカリキュラムになると，箇条書きにした複数のものが含まれていたり一貫するものが出てくるので，今後は文章にまとめたもの，絵図で分かるようなものをつくり込んでいきたい旨の回答があった。

議事2 食産業人材カリキュラムにおける教育カリキュラム（案）について

大浦部会長から，食産業人材カリキュラムにおける教育カリキュラム（案）について，配布資料に基づき説明の後，前回の頂いた意見（必要な能力）が反映されているのか等，発言願いたい旨説明があり，概略次のとおり質疑応答等があった。

- (1) 前回出た意見がこのカリキュラムにどう反映されているのかという確認が当然必要だが、科名があるにしても、中身がどうかということを照らし合わせて整理が必要だと思う。カリキュラムを増やさないのであれば、その中身に実際にやる事業の内容が網羅されているのかを考える必要があると思うので、そこまで落とし込む必要があるのではないかな。
- (2) 部会で議論された項目や意見について、どこまでカリキュラムに反映できる仕組みになっているのか。また、今議論している食産業人材カリキュラムは既存の講義とどのように関係性を持たせて学生や外部に見せていく予定なのか。中身も重要だが、カリキュラムとして立ち上げる方向性は決まっているのか。
- (3) 既存のカリキュラムを大きく変える必要はなく、あくまで既存のものを大事にしながら新規のカリキュラム（フードビジネス論・青森六次産業化論）で足りない部分を補うのが一番良いと感じる。一番難しいのが「青森が好きなマインド」という部分だと思うので、マインドを高めるためにいろいろな青森県の祭りに参加させるというようなものがカリキュラムの一つでも面白いのではないかなと思う。
- (4) 青森が好きなマインドや創業・起業などの部分は、ベンチャービジネス論あるいは経営学入門などに入っていくと思うが、農業経営論などはどうなのか。六次産業化ではそこが重要だと感じる。また、観光の部分と青森県の食産業という部分をどうリンクさせて進めていくのか。食については奥が深いので、観光という部分の結びつきの中で勉強させるのがいいように思う。

これに対し、大浦部会長から、(1) について、

フードビジネス論と六次産業化論に関しては、新規の事業なので部会で議論された意見を反映させやすいので、リアリティーを持って進められるような中身にしていきたい旨の回答があった。

(2) については、

既存の講義に関して、食産業人材カリキュラムのために中身を変更するのは難しいので、現在他で実施している教養関係の授業や農学生命科学部の授業等を活用させていただくスタンスで組み込む予定である。経営関係の授業であればサービス系やフード系の授業に関連させた話を組み込めるよう要望を出し、反映させていただくような形を取る予定である。学生からすると、3年ないし4年かけてこの科目をとってもらい、一定の基準を満たすと食産業プログラムを修了したという修了証が出るイメージで進める予定である旨の回答があった。

(4) については、

観光産業の中で、食産業、食のコンテンツが魅力になっているケースが非常に多いので、観光の部分の中に六次産業化や食産業の活性化、お土産商品開発など組み込みながら進めていくことも考えている。ただ一方で、観光以外の部分でも食のビジネスを単体として考えることができると思うので、同じ並列で進めていくこと

も視野に入れている。また、農業経営論などの内容については、農学生命科学部のカリキュラムの中に農業経営管理論という授業があるので、このカリキュラムを今後どう活用できるのか検討していきたい旨の回答があった。

最後に大浦部会長から、我々が目指しているのは、「観光産業」と「食産業」の両分野において活躍できるじょっぱり起業家を育成するという部分なので、両分野において体系的な起業家育成プログラムを構築できるよう、本部会での意見を踏まえ、食産業人材プログラムの検討構築を進めたい旨説明があった。

以 上

5-3. 第3回 じょっぱり起業家育成食産業プログラム部会議事要旨

日 時：平成28年12月16日（金） 13：00～14：30

場 所：アートホテル弘前シティ

出席者：大浦雅勝（株式会社コンシス 特任教授），野呂英樹（株式会社あおり海山），村上照彦（株式会社みちのく銀行 浅利委員代理），工藤俊介（弘前市産業育成課 福田委員代理），横澤幸仁（青森県産業技術センター 弘前地域研究所）の各委員

陪席者：六沢翼（東北経済産業局），古川康平（東北経済産業局）

事務局：森樹男，熊田憲，高島克史，大倉邦夫，福眞吉教，葛西裕美

議事1 第1回，2回食産業プログラム部会決定事項の整理，確認について

大浦部会長から，第1回，2回食産業プログラム部会決定事項の整理，確認について，配布資料に基づき説明の後，前回の取りまとめた結果に対する意見や提案について，発言願いたい旨説明があり，概略次のとおり質疑応答等があった。

- (1) 農学生命科学部の授業を活用していくとのことだが，どのくらい授業を開発する予定なのか。

これに対し，大浦部会長から，(1)について，独自で開発するのは2～3科目になる予定で，あとは，もともとある食品管理論や既存の授業を活用しながら進めていく予定である旨の回答があった。

議事2 食産業人材カリキュラムの策定について

大浦部会長から，食産業人材カリキュラムの策定について，以下のとおり説明があった。

・食産業人材カリキュラムの策定について

- (1) 学生向けのプログラムと社会人向けの履修証明プログラム，2つのプログラムを実施できるよう検討を進めている。学生向けのプログラムとして次年度開講の予定科目は，フードビジネス論，事業計画演習，サービス経営論，サービス企業論の4つを想定している。履修証明プログラムについては，青森県の基幹産業である農林水産業の資源を活用したビジネスを創出できる食産業人材（じょっぱり起業家）を育成することを目的とし，食産業人材に必要なノウハウを2年間で120時間以上履修した人に対して履修証明を交付するという方向性で検討している。開始日に関しては，2017年10月を予定している。また，履修証明プログラムを取ることで，「食の6次産業化プロデューサー」（食Pro.）という検定も取れるような状態をつくり出したいと考えている。

大浦部会長の説明の後、学生向けのカリキュラム及び社会人向けの履修証明プログラムについて発言願いたい旨説明があり、概略次のとおり質疑応答等があった。

- (1) 履修証明プログラムについて、このプログラムを受けたときの価値が分かるような説明がないと、受けに来る人たちも仕事をしながら履修するというハードルを越えるのは難しいのではないかと感じる。
- (2) 食P r o.と連動してやるという部分は非常に良いと思う。食P r o.について、社会人だけではなく学生にも特典として付与されるのであれば、参加する価値があるし、できるだけそのような特典があればいいのではないかと感じる。
- (3) 学生向けのプログラムと履修証明プログラムは、授業の中身や履修する科目は別ものなのか。
- (4) 食P r o.の資格と連動とあるが、履修証明が取れば、資格が取れたというわけにはいかないのだろうか。

これに対し、大浦部会長から、(3)について、

ベースとしては、学部学生向けのプログラム、フードビジネス論、事業計画演習、サービス経営論、サービス企業論に関して、学生が単位を取れるようなスタイルで進めていく予定である。履修証明プログラムに関しては、単位とどう紐付けるかというところを詰めていく必要がある状況である旨の回答があった。

(4) については、

教育機関でできるのはレベル 3 までとなっているので、通常の授業で足りていないレベル 2 とか 1 の食関係の授業を補うことで、成り立つのではないかと現在検討している旨の回答があった。

次に大浦部会長から、食産業人材履修証明プログラムの表（共通科目部分）に基づき説明の後、共通科目の部分に対する意見や提案について、発言願いたい旨説明があり、概略次のとおり意見等があった。

- (1) 問題解決の中である程度学べるという形になっていてその辺りがちゃんと網羅されていればいいと思う。
- (2) 専門の部分に時代背景や日々の情勢の変化など、業界動向などを学ぶ部分もどこかに埋め込めればいいのではないかと感じる。世の中の動きを情報があふれている中からどうピックアップして自分で物事を考えるか、考える授業があってもいいのではないかと感じる。

次に大浦部会長から、食産業人材履修証明プログラムの表（専門科目部分）に基づき説明の後、専門科目の部分に対する意見や提案について、発言願いたい旨説明があり、

概略次のとおり意見等があった。

- (1) 120 時間という 1 週間に 3 時間とかになるので、その辺りはやはり高いハードルになるのではないと思う。モチベーションを上げるためにはちゃんとカリキュラムを提示しながらやらないと、ハードルが高いままという部分がぬぐえないので、重複している内容を多少精査するなど検討が必要ではないかと思う。
- (2) 社会人だと、基礎知識がある人がスキルアップのために受講することもあると思うので、141 時間のうち 120 時間履修すれば修了できるような、必要な科目を選択して履修できるような仕組みであればいいのではないかと思う。

これに対し、事務局（弘前大学 森）から、部分履修という取り方もあり、修了証が必要なければ、必要な部分だけを受講するやり方もある。食関係の授業はフードビジネス論を中心に開講していく予定で、フードビジネス論を 90 分×15 回の分量で実施し、その中に食 P r o . に関する内容を入れ込むようなイメージである。フードビジネス論を軸に、事業計画演習やビジネスシミュレーション実習など、地域の食関係の企業と連携を図りながら、食の実践的な知識を身につけていくようなカリキュラムを実施していく予定である旨補足説明があった。

また、最後に大浦部会長から、食産業プログラム部会で審議した内容を整理し、起業家育成、観光の分野という 3 つを併存させたものとして履修証明プログラム、あるいは学部向けのプログラムを次回の全体委員会で提示し、全体のものとして議論していく予定である旨説明があった。

以 上

6. じょっぱり起業家育成観光産業プログラム部会議事録

6-1. 第1回 じょっぱり起業家育成観光産業プログラム部会議事要旨

日 時：平成28年7月27日（水） 13：00～14：20

場 所：弘前大学人文社会科学部棟4階 多目的ホール

出席者：西谷雷佐（合同会社西谷 特任准教授）、柳生敏孝（株式会社楽天野球団）、石川啓太郎（株式会社青森銀行）、佐藤大晃（青森県企画政策部 木村委員代理）の各委員

陪席者：竹内恭介（青森県庁）

事務局：森樹男、福眞吉教、葛西裕美、中屋敷雅江

議事1 観光産業プログラム部会の目的について

西谷部会長から、観光産業プログラム部会の目的について、概略次のとおり説明があった。

・観光産業プログラム部会の目的について

観光産業分野において起業家的なマインドを持ち、地域を盛り上げていける人材を養成すること、そのために着地型観光ビジネスを構想し、事業化する力を身につけていくことができる教育プログラム考えること、そして、観光ビックデータを読み解くための論理的思考を身につけ、観光戦略の立案力を高めることができる教育プログラムを検討し、次年度以降カリキュラムに反映させることを目指す。

議事2 観光産業分野において起業家的能力を持つ人材像について

西谷部会長から、観光産業人材の目指すもの、必要な能力について、意見を発言願いたい旨説明があり、概略次のとおり委員から意見等があった。

- (1) 目指すところ、対象とするところは、世界を見てもらわないといけないということだと思う。インバウンドと言ってもなかなか難しいので、世界的な感覚を持った人材というのはこれから求められるのではないかな。
- (2) 何もないところにインバウンドや県外の観光客を呼び込めるような観光の企画、複合体をコーディネートするような能力が必要ではないかな。田舎館村の田んぼアートのような、無の素材を観光客が来るような形にして観光を盛り上げるような企画コーディネート力が求められるのではないかな。
- (3) 何もないような地域資源に独特な価値を付与してコンテンツ化し、かつ、明確化したコンテンツを外部に発信する力、人間力が求められると思う。

- (4) 色々なものを見たり聞いたりする経験は、学生のうちに必要だと思う。その経験を活かしてアイデアを出したり、また、何かの99%真似をして、1%プラスする、それだけでもいいので、ずば抜けた企画力があると、なお良い。観光に限らず、人材像とは、対象が誰なのかというところをしっかりと絞って何を仕掛けるか、ということではないかと思う。
- (5) 何をやるにしても、志を持っているかという部分が、一つの大きなポイントになると思う。発想や着眼点、事業としてのストーリーを自分なりにイメージできるかどうかが人材の能力に非常に大きい部分ではないか。ロジックを頭の中で自分なりにストーリーとして構築できるかが、起業家とか事業を興すうえで必要だと感じる。

引き続き、西谷部会長から、観光産業において求められる能力、起業について発言願いたい旨説明があり、概略次のとおり委員から意見等があった。

- (1) 地域住民を巻き込んで、地元に寄り添った視点も踏まえながら、観光の企画立案ができる人材がいいのではないかと思う。また、年齢を問わず、いろいろな人と意見交換をすることによってアイデアが沢山出てくると思うので、そういう機会を設けることも必要だと思う。
- (2) 起業とは、志や覚悟だと思うので、実際にマネーが絡むトライ・アンド・エラーを学生時代に1年間やってみると、起業という部分に少し扉が開くのではないだろうか。起業実習のような実際に動きだすところを授業に取り入れ、実際におもしろいと感じてもらえるきっかけになるような授業が、起業家を育てるという点で非常に重要になってくると思う。
- (3) 起業するには、起業側と運命共同体になり、損してもいいような形で使用できる一定額のファンドを持ってやるやり方が一番やりやすいと思う。大学に置き換えるのであれば、学内のコンペ形式で企画競争してもらい、一定のバックアップ資金を用意して官民協働で起業家を育成する目的のファンドをつくったりするやり方がいいのではないだろうか。
- (4) 起業も就活も自己実現のための手段だと思うので、色々なリスクをとらない手段の中で、あえてリスクをとって自己実現に繋げるのは、学生の段階では難しいと感じる。

これに対し、事務局（弘前大学 森）から、起業したいというような意識を持たせるには、一回何かの枠で体験して、そこでの成功体験とか達成感を沢山持たせることができるようなプログラムのほうが起業してみようという意識の学生が増えるのではないかと考えている旨の意見があった。

引き続き、西谷部会長から、新しいニューツーリズムについての提言やアイデア、学生に経験あるいは体験してほしいことについて発言願いたい旨説明があり、概略次のと

おり委員から意見等があった。

- (1) 官公庁などでやっている視察旅行について、その部分をターゲットにしている観光の方がいないので、そこにニューツーリズムとして入り込めるのではないかと。また、観光とは人の心を動かして、実際行動させるものだと思うので、相手に行動させるための認知科学の理論を研究し、それらを活かして日本を海外へ情報発信するというようなことを大学で学ぶ機会があればいいのではないかと思う。
- (2) 青森県の人間が青森の魅力、素材を理解していないと、観光で何か強化しようとした時になかなか結びつかないと思うので、まずは青森県に居る人間が青森県の良さやコンテンツ、どのような素材があるのかというところを理解すること、また、それらが網羅されているものを色々な人たちに提供できれば、そこから大きなネットワークとなって地方の観光産業を盛り上げることができるのではないかと。学生については、地域の魅力や素材を知るためのフィールドワークが必要だと思う。
- (3) 自分たちの持っている商品を理解していないと相手に絶対伝えられないので、コンテンツをしっかりと理解することは重要だと思う。あと、経験してもらいたいことは、従業員とお客様のように、同じことで双方の立場を一回体験してみてもどうかと思う。そうすれば、観光の視点からという部分をわかりやすく体現できるのではないかと思う。

最後に西谷部会長から、IoT 導入によりビックデータの収集は容易にできるようになったが、データを解析する人材が不足していることから、データ解析ができる人材育成の部分も教育カリキュラムに盛り込みながら本部会での意見を踏まえ、観光産業人材プログラムの検討構築を進めたい旨説明があった。

以 上

6-2. 第2回 じょっぱり起業家育成観光産業プログラム部会議事要旨

日 時：平成28年11月9日（水） 12：00～14：00

場 所：弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大 八甲田ホール

出席者：西谷雷佐（合同会社西谷 特任准教授），柳生敏孝（株式会社楽天野球団），石川啓太郎（株式会社青森銀行），木村次郎（青森県企画政策部），坂本崇（弘前コンベンション協会），渡部賢（星野リゾート青森屋）の各委員

陪席者：竹内恭介（青森県庁）

事務局：森樹男，福眞吉教，葛西裕美，中屋敷雅江

議事1 第1回観光産業プログラム部会検討事項の整理，確認について

西谷部会長から，第1回観光産業プログラム部会検討事項の整理，確認について，配布資料に基づき説明の後，前回の取りまとめた結果に対する意見や提案について，発言願いたい旨説明があり，概略次のとおり意見等があった。

- (1) 前回も議論になったが，起業家育成の部分と観光人材育成の部分セットでやっていく方向性なのか。だとすると，観光分野に関する専門知識を深めるカリキュラムも重要だが，起業家としてどのようなものが必要なのかという部分のカリキュラムがもう少し分かりやすく反映されていたほうが良いと感じる。
- (2) 観光のことが全くわからないところからスタートになると思うので，1年次に観光の基礎等をやったほうが良いと思う。観光とはどういうものなのかを最初にイメージをつけないと，イメージしていたものと違ったなど時間をうまく活用できない可能性がでてくると思うので，早い段階で観光の基礎等を知り，自分のやりたいことを知ること，この先の目指すものやその後の過ごし方が違ってくるのではないかな。
- (3) 観光業で働きたいというのと起業したいというのは大きく違うと思うので，観光業に興味を持って働きたいというところまでは論理をしっかりと学ぶ必要があると思う。また，起業家育成については，既に起きている現場でヒントを得て，そこから起業したいという発想につながるような気がするので，ヒントを見つける場所という部分でインターンシップなど現場を早い段階（1年次など）で経験させることは重要だと思う。
- (4) 起業家というのはある意味我々の発想を超えた思想が出てこないといけないと思うので，できるだけ早いタイミングで理論プラス経験を学ばせたほうが規制されたルールを意識せず若者らしい斬新な発想ができ，おもしろい人材がでてくるのではないかな。
- (5) 最近仕事で学生と一緒に旅行に行き，観光診断をやった中で感じているのが，最近の若者は旅の経験が少なく，旅の本来の楽しみ方を知らない状態で大学に入学してきているように感じている。旅のおもしろさ，楽しみ方が分からなく，経験値も少ないので，そこをどのようにすればいいのかが大きな課題だと思っているので，1年次で旅の楽し